

独、米、ソ連、日本は今実用的中層トロールを開発し、魚探と組み合わせて適当な深さのイワシ類のような沖合浮魚を漁獲できるように発展した。魚探で魚群の所在を知ると共にトロールのヘッドローブにつけた魚探で網の深さを知るだけでなく、網の中にはいる魚と網の下を行く魚を知ることができる。網の深さを調節してその魚をとる。従つてふつう表層に浮上しない西阿沖のイワシのような魚をこのようにして漁獲することができる。

西アフリカ沖の魚の低廉な大生産に拡大さすこのような漁業技術や新事実から実現するにはまだずいぶん時間がかかるだろうが、それはすでにはじまつている。

1964年2月ザンジバルで、甲殻類のシンポジウムが開かれた。（宇田 道隆）

4 太平洋に配属されたフランスの新海洋調査船コリオリ号

フランス国海外科学技術省(ORSTOM)所属の新鋭海洋調査船コリオリ号(Le Coriolis)が1963年10月31日進水、1964年10月17日南太平洋ニューカレドニアのヌーメア港に配属され活動を開始した。同船の名は海洋力学で有名なコリオリの力(地球自転偏向力)の定理を1835年発表した学者 Gaspard-Gustave Coriolis (1792~1843)に因んだ。長さ37.6m、幅8m、吃水4.1m、450総トン、航続8000マイル、30日、主機350馬力(ディーゼル)2基(計700馬力)船速巡航11ノット1.5~12.5ノット(可変)乗員30名(士官7、クルー12、科学者11)。実験室2(55m²)航海計器および測器は、自動パイロット、チャイロコンパス、それと組合せの Raytheonレーダー(50マイル)、600m深航海用音響測深機、12000m可測Atlas型音響測深機、直径12mmの鋼索4800m巻ウィンチ(水力式5トン)直径6mmの8000m長鋼索又は4mmの12000m鋼索でのブランクトン採集、4mmの4000m深まで測れる海洋物理学的観測調査具、GEKは300mワイヤで、BTは1500m長(3mm)ワイヤ、鮪延縄一式、電気的ネットゾンデ(1500m深用)を持つ。生餌タンク用ホルド2、中波、短波無電、実験室、居室エアコンデション、自記表面水温計、遠心分離機、冷凍室、真空水圧濾過装置、ヒーター等を具える。（宇田 道隆）

5 ベルーのアンチヨビー漁獲制限

出所：Ocean Fisheries Oct. 1965. p28。

1500隻のベルーのアンチヨビー(カタクチイワシ)漁、船が1965年8月キヤヤオ、チンボテ、フアーメイ、スーベ、フアチヨ、イロの漁港で、ベルー政府の漁業禁止令によつて空しくとどまつた。さらに厳しい制限令がカタクチイワシ乱獲防止のため将来出ることが予想される。これは1962年9月海洋研究所の勧告に従つた措置である。8月は元来最も漁獲の少ない頃なので業界と科学者の妥協によつてこの月を禁漁月に選んだ。その間船、工場の修理などをする。海洋研究所の Zacarias Popovici 博士によれば「カリフォルニアのサーヂンが消失し

て1936～37年漁期72万6,120トンから1963～4年シーズンに1350トンに生産衰退をみたのに平行的な傾向がみられ、地理的分布が米国全沿岸からカナダ・バンクーバ島北端まで拡がっていたのが、カリフォルニア南の端末狭域にちぢまつた。日本のマイワシでも以前に似た衰退があつた。しかし研究の結果海況変化が影響したとみられた。ペルー・チリーでは比較的暖い水がマイワシ分布に影響する。1963年7月～12月北チリからカタクチワシの相対的消滅およびその斑点状の漁況が北チリ及びペルー沿岸で最近の月にみられている。ペルー沿岸で最悪の影響を受けた漁港の一つのチャンケイで、他の場所へ（サラグエリイ港に近いチカモあたり）に10フィシユミール工場の移転を報ぜられた。カタクチ漁業について同研究所の下した結論というのは次の通りである。

- 1) 1964年の記録的漁獲量880万トンであつたが、水産業は既にカタクチワシ開発の極限に到達したとみる。
- 2) 連続的乱獲はストックを低下し、コストが増して、フィシユミールの価格が上らない以上は漁が不経済になるに到る。
- 3) 新しいフィシユミール工場設置は禁止すべきであり、現存工場は拡張してはならない。（法律で定められた。）
- 4) フィシユミール処理工場は原料のムダを減すようにすべきであり、より少ない魚からより多くの価値をひき出すようにすべきである。
- 5) 未成熟カタクチワシを余計に漁ることは中止すべきである。（立法化された）

この1966年禁漁措置は将来カタクチワシの産卵期とその他ストック評価に基いて2ヶ月以上に拡げるといふ噂もある。今回は1965年2月23日禁漁令が公告された。

（宇田 道隆）

6 カツオノエボシ（俗称電気クラゲ）

の北上分布

1965年8月異常に大量のカツオノエボシ（Portuguese man-of-War Physalia physalis）が大西洋岸の米国ニューヨーク附近からバージニア州にかけて漂着した。この毒棘をもつ危険な熱帯海産のクラゲの一種はフロリダ州以北に大量に現われることは稀有のこととされる。日本近海でも1964、65年の夏季相模湾方面の海水浴場に大量に現われて新聞記事になつた。1930年代にもよく現われた。周期的大発生と暖流の北上優勢接岸（特に南寄りの風が吹走りに関係する）によるものとして、その指標生物的の意義をもつものであろう。ハリセンボン（バラフグ、ハリフグと俗称）の大量遊接岸も同様の意味で重要で記録に値する。

（例）—日本海洋学会誌

（宇田 道隆）